

一 生きることが辛いのは誰かのせいだろうか？

自分のことをわかってほしいという心の叫び

一九九七年三月末、私はアメリカにいた。そこで驚くべき事件が起きた。

それは「ヘブンスゲート」という宗教団体のメンバー三九人が集団自殺したという事件であった。彼らはカリフォルニア州サンディエゴ郊外にある豪華な家で自殺した。ヘール・ポップ彗星と一緒にUFOが迎えにくる。それに乗って神の国へ行くための自殺であった。

なんと彼らは自殺する前にビデオで自分たちの映像を撮っていた。テレビのニュースではそのビデオが放映された。

集団自殺した彼らは「私たちは特別な人間」で「自分たちは天使として地球に送られてきた」(註1)と主張していたのである。そして自分たちはこの世の一般の人々よりも精神的なものを大切にする優れた人々であると主張した。自分たちが死ぬのはこの世ではそうした精神的なものが与えられないからだといっているのである。

彼らはこの世の中は自分たちが求めているものを与えてくれなかったという。

比喩的な言葉で彼らの言い分を説明すれば、自分たちのいる部屋の花瓶が汚れている、この花瓶は汚いから別の部屋に行きます、ということである。

この世の中は私を理解してくれなかった。だから私を理解してくれる世界に行きます、ということであろう。

これはまさに集団ナルシズムである。「私たちは高貴な存在、あなたたちは俗物」と主張しているのである。あなたたちには私を理解できないというのである。

もちろん口ではそう言いながらも彼らは心の底では世の中に認めてもらいたいのである。集団自殺した彼らも、あるいは「世の中なんてくだらない」と虚勢を張る若者も、「私を認めて!」「オレを認めてくれ!」と叫んでいるだけである。

しかしこの自殺した人たちは自分たちの集団の優越性に酔っている。明らかに自己陶醉である。自分たちはこの世の中が与えてくれるものよりもっと素晴らしいものを求めていると主張する。この世の中で感じることでできない善や正義を求めているのだと主張する(註2)。

つまり「私たちは精神的なものを求める高貴な人間である」と言い、自己賛美に酔っている。自分たちのほうが世の中の人たちより優れていると感じることで満足しようとする。

実は彼らの本質は精神的なものを求めるといふこととは反対で、強迫的に名声を追求しているだけである。

彼らにとつて第一に大切なことは「他人に優越すること」である。

しかし彼らには脂ぎった精悍な事業家のような強さがない。心の底では世俗の中での成功を求めながら、現実から逃げてしまっているために、今の生活からは満足が得られない。この集団は心が満たされていない人々の集まりである。そこで満たされない人々が集まって「私たちはこの世の中の人よりも優れている」と主張することで満足感を得ようとしている。

彼らが求めたのは現実の世の中で「他人に優越すること」であった。優越することで自

分の安全を確保したかった。しかし彼らには俗物政治家のようなエネルギーがないから、現実の世の中で他人より優越することができなかった。そこで「解釈」によって他人より優越しようとしたのである。

私たちは高貴な存在、あなたたちは俗物。このように世の中を「解釈」することで、自分たちが求める優越を確保したのである。

そしてこの世の中で生きている人たちは無知である（註<sup>3</sup>）、だから私たちはあの世へ行く」と主張する。彼らは自分たちが世間の基準で測られるのを嫌がっているだけである。

考えてみれば、自分たちの優越を信じてくれる人がいなければ、自分たちで優越していると叫ぶしか安全の道はない。

たとえば離れ島にしていると。もし船が来ると思えばどうなるか。船が来るということを信じられれば、人々は畑を耕して働く。働きながら船を待つ。

逆に迎えるの船が来ないとわかれば、誰でも恐怖する。あるいは「いや、この島がいいのだ」と思い込もうとする。それが集団自殺した三九人である。

彼らは自殺するときに「私たちは幸せ」と言っているが、これは「いや、この島がいいのだ」と言っているのと同じことである。彼らは嘘の毎日で恐怖感を消そうとしている。

一 生きることが辛いのは誰かのせいだろうか？

しかし心の底では船が来ないと知っているから、何か生産的なことをするつもりはない。ヘブンズゲートの教祖だったアップルホワイトの言っていることはつまり「世の中の人には馬鹿。自分たちはあの世で幸せになる」である。

大切なことは、このアップルホワイトはそれを言い切っていることである。「えーと」とか「あのー」がない。

教祖は特定の相手を見ていない。一点を見つめている。つまり万民に話をしていて。力強く、間をとって話す。

言い切っていることが傷ついた人々にとって「魔法の杖」になる。

この教祖は人にわかるように話している。

テレビのニュースに出てくる信者のほうはぶつぶつ言っていて聞き取りにくい。それは自分で自分がわかっていないからである。

悩んでいる人の手紙と同じで、彼らは話すときに相手のことを考えていない。悩んでいる人の手紙は、読む人のことを考えていない。そこがナルシストなのである。

人は追い詰められて「この私をどうにかしてくれ！」と叫ぶときには、目をきつと見開いた人のところに行く。いわゆるヘブンズゲートの教祖のような人のところに行くのであって、仏像のように半分目が開いた人のところには行かない。

自分の病気が何だかわからないとき、自分の体のどこが悪いのかわからないときには、目を見開いた医者のところに行く。内科の診療が終わって自分の悪いところがわかれば、耳鼻科のことを聞くとときには半分目を開いた先生でいい。自分でどこが悪いかわかっているからである。

人間的なものを感じる心を失っていませんか？

「異質の（『私でない』）世界は劣等で、危険で、不道徳である。それゆえナルチステイツクな人は最後には非常に歪められた人間になってしまふ」（註4）。

集団自殺した人々は実は自分たちが人間的なものを感じる能力を失っているだけだということに気がついていない。もちろん気がついていてもそれを認めない。

誰でも周囲の人から間違いを指摘されることは辛い。だから情緒的に未成熟な人は周囲の人から間違いを指摘されてもそれを認めない。

自分たちが人間的ではないから、人間的なものを感じることができないのである。それをヘブンズゲートの人々はこの世の中が人間的なものを与えないと原因をすり替えた。

何事もすり替えないで物事を見られると、自分の道が見えてくる。今の苦しみの原因が

一 生きることが辛いのは誰かのせいだろうか？

わかり、それにきちつと対応できるようになる。彼らが生き辛さの原因は自分にあると思えば、ここで飛躍できた。

しかし彼らは生き辛さの原因を自分以外のところに求めてしまった。彼らの運命の歯車が狂ったのは、自分以外のところに苦しみの原因があるという考え方に執着してしまったからである。

何か事が起きたときにその原因が自分にあるということを知れば、事は収まる方向に動き出す。しかし彼らのように自分以外のところに原因を求めていくと、事は悪化する方向に動き出す。最悪、彼らのように自殺することになる。

以前、この集団に属していたメンバーは彼らを精神的なものの追求者であり、豊かな感情の持ち主と言っている（註<sup>5</sup>）。

しかし彼らは精神的なものの追求者などではない。それどころか俗物である。彼らの感情が鈍化しているだけである。

自殺前に撮影されたビデオを見てみると彼らには自然の表情がない。

彼らから見れば俗物と見える世間の人のほうがずっと精神的なものを求めている。自殺した彼らは現実の自分の人生で目的を喪失しているだけである。

彼らは精神的なものを求めているのではなく、ただ日常生活で満足していない、自己実現をしていないというだけの話である。彼らのそれまでの日常生活がノーマルな生活ではない。だから生活に満足がない。

彼らは自分たちの日常生活の中に何か問題があるのに、それを認めることを拒否した。息苦しさの原因を他にすり替えた。彼らは「私は特別な人間」と言って現実から逃避してきたから虚無感に苦しんでいるだけである。

このようなナルシスト集団の教祖は、メンバーのナルシスティックな願望を満足させる必要がある。その満足感を解釈から得る。現実に額に汗して働いて満足するのではなく、座っているだけで満足する方法である。

それは「あの人たちは愚か者、僕たちは偉大なものねー」と仲間で言い合うことである。それを可能にする価値観である。

その満足は「自己の集団が優秀で、それ以外の集団は全部劣等である」という共通のイデオロギーによってあらわれてくる」(註6)。

ヘブンズゲートのメンバーも自分たちが偉大なのである。信じられないほど偉大な人々なのである(註7)。

一 生きることが辛いのは誰かのせいだろうか？

これが集団・仲間ナルシズムの恐ろしさである。この人々は現実からは満足を得られないから、この集団・仲間の与える満足で生きようとする。その満足なしには生きていけない。だから彼らはこの集団・仲間なしにはどうにも生きていけないからである。

この仲間しかナルシステイックな気持ちを満足させてくれないからである。

強さがあれば自分で考えることができるはず

それはこの仲間以外には安らぎがないということである。彼らにとって家庭は安らぎの場所ではなかった。

家庭には家庭を維持するためにそれぞれの成員が果たさなければならない役割と責任がある。その役割を遂行し責任を果たすのは辛い。会社には会社のルールがある。

外の現実には厳しすぎる。だから彼らはこの集団・仲間の与えてくれるものにしがみつく。弱いままで生きる方法はこれしかない。自らのナルシズムを克服する努力をせずに生きていく方法はこれしかない。

彼らは「あっちの水は泥水よ、こっちの水がきれいなのよ」と言っている。でも「こっちの水」には青酸カリが入っていた。だからそれを飲んで彼らは死んだ。

彼らは最後まで「カラスは白い」と解釈した。

それはもしカラスを黒いと認めてしまえば、自分たちの弱さも認めなければならないからである。自分たちの無責任さも認めなければならぬからである。

ゆがんだ集団・仲間であればあるほど、メンバーはその集団・仲間なしには生きていけないのである。「自分たちは弱くない」「自分たちは幼稚でない」「自分たちはナルシストでない」「悪いのはあの人たち」、そう認めてくれるところはこの世の中にはない。そう認めてくれるのはこの集団・仲間内だけである。だからこの集団・仲間なしに彼らは生きてはいけないのである。

彼らがしがみついているのは「自分は偉大である」という自己イメージである。この自己イメージへの執着が彼らの生き辛さの原因である。そのイメージを守ってくれるのはこの集団・仲間しかない。この集団・仲間以外は「カラスは黒い。おまえは弱い。成長しろ」という現実を突きつけてくる。

論語に「子の曰わく、君子は周して比せず、小人は比して周せず」というのがある。君子は広く親しんで一部の人におもねることはないが、小人は一部でおもねりあつて広く親しまない。